

日本統治時期の台湾医学会

張 秀蓉

国立台湾大学医学部附属病院顧問／台湾医学史学会理事長／国立台湾大学歴史学科元教授

日本が台湾を領有した後、日本の医療従事者により台湾でいくつかの学会が設立された。その中で最も重要なのは1899年10月台北医院に設立された医薬学研究会である。この研究会は「台北医院医薬学研究会」という名前で活動し、会則を定め、会長1名と幹事2名を置き、台北医院の医師、薬剤師などの職員を会員とし、学術研究を目的とする。また、台北医院の職員以外の有志者も入会できる。毎月の第三日曜日の午前中に台北医院で例会を開くが、設立一年後の1900年11月11日、18日に総会を開いた。なお、当時の総会プログラムからすでに後の「台湾医学会」の形が窺える。

1901年4月26日第18回例会に「台北医院医薬学研究会」を拡大するという提案があり、激しい議論の末採用され、直ちにその準備に着手された。その発起人には高木友枝、岡田義行、青山潔、堀内次雄、木下嘉七郎、岸一太、築山揆一などが挙げられる。

準備期間中、学会拡大の準備に携わろうと軍病院の職員をも誘ったが、軍病院には自らの学会と会誌があるため辞退された。そのため、台北医院医薬学研究会のメンバーを主として準備を進める。1902年7月5日、堀内次雄、青山潔をはじめとする発起人16名が入会案内状および医学会会則草案を台湾各地の公医に送った。会則草案より次のことが窺える。まず、学会名を「台湾医学会」とし、医学の研究及び知識の交流を目的として、在台医師及び医療従事者を会員とする。次に、月例会を開き、会誌を毎月発刊する。会誌は会員に配るほか、会員以外にも一般販売する。その内容については、学説及実験、熱帯医事に関する中外彙報、通信、寄書、雑録、医事に関する法令、人事など多岐にわたるものである。役員構成について、会長1名、幹事及び地方幹事数名、書記2名があるが、有給職は書記のみである。

一方、台北医院の院長・山口秀高が同僚の助力を得て、1899年2月25日に『台湾医事雑誌』を創刊した。この雑誌は台湾の医事衛生の状況を紹介し、「我儕が天職を完ふせんこと」を期するために創刊されたものである。1901年末山口氏は台北医院の院長を辞任し、『台湾医事雑誌』も同年12月19日「終号」の発刊をもって終了となった。『台湾医事雑誌』は合計三編、31号発刊されたが、合併号があるため全部で22冊である。

1902年8月2日台湾医学会が成立し、9月20日『台湾医学会雑誌』創刊号が発刊されたが、発刊の辞はなく、構成や目次から見ると、『台湾医事雑誌』を受け継いだものだと考えられる。『台湾医学会雑誌』は創刊より1945年日本統治時期が終わるまで、計481冊刊行された。隔月に刊行する時期があり、また、増刊号2冊、付録21冊がある。1933年2月28日第7号が刊行されてから、発刊日が毎月28日と定まり、今日に続いている。

1903年11月8、9日第1回総会が開かれ、1945年まで計38回開催された。例会は毎月1回開催される。毎回の例会や総会の開催の様子及び講演内容は雑誌に掲載される。

日本統治時期、台湾医学会の会長はたいいてい医学校校長、医専校長、台北帝大医学部部長が兼任する。歴代会長を就任した順に並べると、高木友枝(1902-1919)、堀内次雄(1919-1936)、三田定則(1937)、永井潜(1938)、森於菟(1939-1941)、富田雅次(1942)、小田俊郎(1943-1945)。台湾医学会は戦後も続いており、今日まで111回総会が開催され、理事長も台湾大学医学院院長が兼任する。

会員数に関して、1902年成立した時は187人、1944年には1,438人に達した。総会は講演を主として、見学ツアー、懇親会などがあり、会場の外には学術標本、新型医療器具、撮影機材なども展示される。今日の総会も引き続きこのようなイベントが行われる。

『台湾医学会雑誌』及びその前身『台湾医事雑誌』には日本統治時代以来の台湾の医学研究の成果が多く掲載され、台湾医療史を異なる視点から研究を推進できる貴重な史料だと言える。この雑誌は日本が台湾の現代医学の基礎を固めた証しであり、殖民医学研究に欠かせない重要な材料でもある。